

「御国をきたらせたまえ」

詩篇 第67篇1節～5節  
マルコによる福音書 第1章14節～15節

説教 村上修平牧師

主の祈りの中で、「み国をきたらせたまえ」と祈る時、私達は、神様が愛と恵みによって支配される神の国の到来を祈り求めています。聖書は、主イエスが再び来られる終わりの日に、神の国が完成し、私達の救いが成就されると約束します。けれども、神の国はなかなか来てくれません。主イエスが「しかり、わたしはすぐに来る」と言われてからもう2千年も経ちました。あまりにも遅いのではないのでしょうか。これまでたくさんの人々が、「み国を来たらせたまえ」と祈ってきたはずですが、なぜ神様はすぐに聞いて下さらないのでしょうか？

主イエスはその宣教の始めに、「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」（マルコによる福音書1章15節）と言われました。《時が満ちる》という言葉は、ちょうど、水がグラスの口をこぼれて溢れ出るように、神の恵みが私達の世界に一滴一滴注がれ、ついに満ちあふれたことを表しています。神様がこの世界を救おうと決意され、イスラエルの民に神の国の到来を約束されてから、神の国はたえず前進し続けてきました。そして、ついに神の御子である主イエスご自身がこの世界に来て下さって、神の国は私達にもいよいよ身近なものとなったのです。

私達は目的もなくただなんとなく「時」を過ごしていることがあるかもしれません。しかし、それではもったいないです。主の祈りを祈り続け、神の時に目を向けるならば、私達は人生の目的を教えられ、神の恵みに満ちあふれた、本当に充実した人生を生きることができるのです。

『どうせ祈っても何も変わらない』と思える時も、主を信じて祈り続けることが大事です。世の終わりに、良い香りに満ちた金の鉢が小羊の前に捧げられること、そして「この香は聖徒の祈りである」と記されています。（ヨハネの黙示録5章8節）私達の祈りは全て良い香りとして主イエスのみもとに届いているのです。どんな小さな祈りも無駄に地に落ちることはありません。

FEBC（キリスト教放送局）で、野村祐之氏（青山学院非常勤講師）の祈りの体験が放送されました。野村氏はアメリカで肝臓移植手術を受けて、激しい痛みの中で神様に叫んだそうで

す。すると、『みこころならば、みこころのままに』という囁く声を聞き、背中の下で体を持ち上げてくれる手の存在を感じたそうです。そして、東京の教会で自分のために祈ってくれる兄弟姉妹の姿、そして小さい少年の姿が幻の中に見えたと言います。その少年は幼い頃に病気の人の為祈っていた自分自身であることに気がつきました。神は一言一句漏らさず祈りを聞いて下さる方であり、祈りは時空を超えて私達を支えてくれる手である事を、野村氏は証されています。

主イエスは、「悔い改めて福音を信ぜよ」と言われました。この言葉は、神様のもとに繰り返して立ち帰り、福音を信じ続けなさいという意味があります。そうすれば、毎日が空しく過ぎることはありません。私達は神様を信じて祈ることを通して、今すでに神の国の力を味わうことができるからです。

神の国は死んだ後に行く場所のことではありません。神の国を、オーケストラの演奏会にたとえてみましょう。オーケストラにはそれぞれ担当するパートがあり、各パートが指揮者の指揮に合わせて演奏をする時に美しいハーモニーが生まれます。主イエスは、観客席に座っている私達に向かって、「ここでわたしと一緒に演奏をしよう！」と招き、私達が神様のために賜物を用いることを願っておられるのです。神の国は遅いといつづやくのを止めて、神の国の完成の為、私達はそれぞれの持ち場を担当させていただきます。

「ある人々がおそいと思っているように、主は約束の実行をおそくしておられるのではない。ただ、ひとりも滅びることがなく、すべての者が悔改めに至ることを望み、あなたがたに対してながく忍耐しておられるのである」（ペテロの第二の手紙3章9節）主は、私達を愛するが故に、私達を忍耐強く待っておられるのです。もちろん、私達の人生には辛いこともたくさんあります。主イエスが宣教を開始された時も、「ヨハネが捕えられ」（14節）、世界が闇に包まれた時でした。しかし、主イエスが、『神の国はあなたがたの所に来ている』と力強く宣言された日から、曇り空の向こう側、主イエスの笑顔はいつも私達に向けられています。

（記 村上修平）